

岩つつじの歌

枕草子（春曙抄本）の「草の花は」の末尾に近く、つぎのような一節が見える。

岩つつじは異なることなけれど、「をりもてぞみる」とよまれたる、さすがにをかし。

「異なることなけれど」は、清少納言の時代の一般の審美眼には、この花がさして問題とされなかったことを物語っている。そういう花ではあったが、「をりもてぞみる」とよまれると、「さすがにをかし」ということになるのである。この「をりもてぞみる」とつづけられた歌というのは、和泉式部のつぎの作をさしているのであろう。

岩つつじをりもてぞみるせがきしくれなぬぞめの衣ににたれば

この歌は、現在和泉式部正集に入っているが、勅撰集では後拾遺集春下にも収められている。

枕草子に引かれた「をりもてぞみる」の詞句が、和泉式部の右の歌の第二句をさしたものであるとすることについて、清水浜臣は、つぎのようにいっている。

此歌の作者も、此草紙の作者も、同時代の女房なるを、かく引出ていはれつるは如何とも思はるれど、かかる例もあることにて、此ほどの人たちは、そのをりに人口にふれし歌をば、同じ時代の歌にても引歌などにせしことと見えたり。云々

まさにそのとおりであったのだろう。後拾遺集はむろんのこと、現在この歌が入っている正集も、清女がこう書いた当時は、まだ成立を見ていなかったと思われるから、この歌がそれらの集に収められる前に、何かの事情で「人口にふれ」る機会があったものと思われる。

そうだとすれば、右に引用した枕草子の一節は、清少納言が、たがいに歌の贈答もするような朋輩としての式部の詩才に、すでにある驚異の念をもって対していたことの証左ともなり、興味がふかい。

ただ問題は、「をりもてぞみる……」とつづけられることが、清女の審美眼にもかなうような、新しい美観をもたらしたのはなぜであるか、ということである。それを明らかにするためには、まず「岩つつじ」の詠みこまれた歌の系譜を調べてみなければならぬ。

古今集恋一に、「題しらず」「詠人しらず」として、つぎの歌が入っている。

思ひいづるときはの山の岩つつじいはねばこそあれ恋しきものを

この歌に対しては、従来二様の解が与えられている。「思ひいづるとき」を本文とし、それを下の「いはねば」につづくものととり、「ときはの山の岩つつじ」を「いは」を導く序とするのは、多くの注釈家の説であるが、香川景樹の古今和歌集正義は、これと違った説をたてている。すなわち、上三句を序とし、「思ひいづる」は「とき」の枕詞だとしているのである。

景樹は、もし、一般の注釈家のように、これを本文とすると、下句の強い語調に照応しないといっており、窪田空穂氏も古今和歌集評釈で、この説に賛成していられる。私も、結論としては景樹説に従いたいと思うのであるが、その理由を述べる前に、景樹説によって口訳を試みておくことにしたい。上句を序とすると、主旨は下句に展開されているわけであるから、「口には出さずにいるけれど、心ではたいそう恋い慕っているものを」の意となるうか。今かりに、「思ひいづる」を本文の文脈として生かして、「恋しい人を思い出すときは」をその頭にもってくるとすると、景樹のいうように、いかにも緊迫した下句の語調にそぐわない感じがするのである。

「思ひいづる」を「とき」の枕詞とする詠法は、すでに古今集夏の部にも見えている。やはり「題しらず」「詠人しらず」であるが、

思ひいづるときはの山の時鳥からくれなるのふり出てぞなく

というのがある。「思ひいづる」や「からくれなるのふり出てぞなく」などの措辭に、恋の心が余情として感じられるが、この歌の主旨は、「ときは山の時鳥が、声をふり立てて鳴くことだ」という風に展開されているようである。この場合も、「思ひいづる」は「ふり出て」を導く序として用いられているとする、景樹・空穂説に従ったわけである。もし、「思ひいづる」を主想の展開の託された本文として、文脈のうえに浮き上らせるとすると、「恋しい人を思い出すときは、ときわの山の時鳥のように、ただもう声をふり立てて泣くことだ」となるが、そうなるとは本居宣長のように、「四の句、ただふり出の序のみにて、恋二に、紅のふり出つつなくとあるとは異なり、さて此の歌は、もはら恋の歌なるを、ここに入れるは、いかにぞや」(遠鏡)と疑わざるを得なくなるのではないか。古今集撰者が、夏の部に次序しているのは、この歌を「時鳥」の歌と認定したことによるのではないか。そうすると、「思ひいづる」は、景樹説に従って、二つとも「とき」の枕詞と取る取り方が妥当ではないかと思う。

むろん、万葉集に、

思ひいづる時は術なみ豊国の木綿山雪の消ぬべく思ほゆ(巻十、冬相聞)

思ひいづる時は術なみ佐保山に立つ雨霧の消ぬべく思ほゆ(巻十二、寄物陳思)

などであるように、「恋しい人を思い出す時は」と、最初からはっきりと打ち出す相聞的発想の

歌が、古くからあったことは事実である。それが平安朝に入ってから、

思ひいづるときもあらじとおもへどもふといふにこそおどろかれぬれ（蜻蛉日記）

思ひいづるときぞ悲しき奥山の木の下露のいとどしげきに（同）

のように受けつがれてきた一方、万葉集にはまだ見えなかった歌枕としての「ときはの山」（山城）の出現をまっけて、いつからか、「思ひいづるときはの山の……」という成句が、王朝人の口にあまねくのぼるようになったものと思われる。もし臆測が許されれば、「常磐の緑」にかけて、恋の永遠を祈念する王朝人の心情地帯が、この二語の結びつきを容易にし、結びついた一つづきの語から生まれる新鮮なリズムが、逆にあまねく人口に膾炙していったのではなからうか。その場合、恋の実情は、「思ひいづる」の語の背後にかくれて、ただ余情として王朝的ニュアンスを湛えるものとなるのである。

さて、和泉式部の「岩つつじ」の歌に再びかえることにしたい。

「岩躑躅」は、『本草和名』によると、「羊躑躅」の文字を当て、羊が誤ってこれを食して死んだので、この名があるとしている。そして和名としては、イハツツジ以波都都之のほか、シロツツジ之呂都都之・モチツツジ毛知都都之をあげている。しかし式部の歌は、下句が「くれなるぞめの衣ににたれば」であるから、ここに別名の一つとしてあげてある之呂都都之が「白躑躅」であるならば、式部の歌には当ては

まらないことになる。従ってここでは、大言海に「花ノ赤クシテ、きりしまつつじノ如キモノ」とあるのに従いたい。

とはいえ、式部はこの歌で、「岩つつじ」をまともに賞美しているのではない。式部もまた一代の審美家清少納言と同様、「岩つつじも異なることなけれど」の趣味世界に住んでいたにちがいない。が、その「岩つつじ」を折りとる動作の途中、花の色の連想から、ふと、恋人がかつて身につけていた紅染の衣のイメージが閃き、改めてその花をつくづくとみるのである。「みる」といっても、自然美としてまともにはみるのではなく、「せこがきし紅ぞめの衣にたれば」という条件が、「みる」を規制しているのである。自然美としては、当時すでに凡常の美とされていた。式部の心を、この花が捉えたとすれば、恋人の着ていた紅染の衣を、眼前の花から連想したからである。それがこの歌のモチーフであった。しかし、清少納言が「さすがにをかし」といったのは、そういうモチーフについてはなかった。これといってとりえのない「岩つつじ」の花ではあるが、「をりもてぞみる」という式部のポーズに心ひかれたからであろう。古今集では、副式的観念として使われていた「岩つつじ」ということばに、ここでは、恋人の着ていた紅染の衣の連想から、ふと折る手を休めてその花をみる、という、いわば恋情の身体的表出によって、一つの実体が与えられたものといってよい。

これも、和泉式部の、古今伝統のうけとり方の一面を語る事象であろうか。(昭和三十四年四月)